帯広畜産大学同窓会報

第12号 平成17年８月 帯広市稲田町西２線11番地 帯広畜産大学内 帯広畜産大学 同窓会事務局発行

第12号発刊によせて

同窓会会長　高田　　薫（昭和31年総農卒）

構造改革、教育改革など、未だ改革の荒波に社会全体が揉まれている昨今ですが、会員の皆様には、ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、母校帯広畜産大学は、大学法人として新たなスタートを切ってから２年目を迎えましたが、大学創立以来のこの大改革を大学発展の好機ととらえ、大学が一丸となって取り組まれておられることに、心強く感じております。

特に、時代の変化や学術の進展に対応した取り組みは、わが国の生命科学分野における「21世紀ＣＯＥ〈卓越した研究教育拠点〉」に選定されるなど、高い評価を受けられるとともに、さらに畜産衛生学研究分野における世界最高水準の研究拠点を目指し、研究を進められています。

又、地域社会や国際社会との連携を深めた活動も進められていますが、教育研究連携では、各大学、産業界との連携とともに、地域に根ざした活動を積極的に推進され、活力ある地域社会の構築に大きく貢献されています。

国際社会との連携については、国立大学で最も長い実践と伝統があり、平成14年度には外務大臣表彰を受けられており、更に大学学位・授与機構から「国際的な連携及び交流活動」で高い評価を受けられています。この２月にはＪＩＣＡとの連携協力協定も締結され、一層の発展・充実に取り組まれています。

限られた施設・設備・陣容で、教職員の方々の創意工夫と熱意により、多くの事業が計画・実施され積み上げられた実績は、各界から高い評価を得られていますことに、心からの敬意と感謝を申し上げる次第です。

私は、この５月に10年振りに１年間勤めた中国の大学を訪れましたが、見違えるばかりの整備・充実ぶりが印象的でした。在勤時の中国は、国のスローガンが「温飽」から「小康」に変わって間もなくの時でした。

この国家目標への取り組みとして、「先に豊かになれるものは、豊かになりなさい」と積極的な実践を求めていました。大学も従来の枠に捉われず、積極的且、大胆な改革・改善がすすめられようとしていました。

中国は、特に地域性が強いといわれていますが、現在の大学発展は、地域振興の一翼を担い且地域との連携・協力の結果と、大学に対する地域の熱い期待の表れと思われます。日本の大学も法人化を契機に、思い切った発想、新しい領域の開拓など幅広い活動に取り組まれています。

同窓会は、色々な立場から大学の活動を支援していきたいと思います。現在、帯広畜産大学後援会を中心に教育・学術研究活動に必要な援助を行ない、会員の方々からもご協力を頂いていますが、一層のご支援ご協力をお願いいたします。母校の発展と会員の皆さんのご健康とご活躍を心から祈念申し上げます。

“個性輝く畜産衛生学専門店単科大学を志向して”

学長　鈴木　直義（昭和30年獣医卒）

帯広畜産大学は、平成16年４月から他の国立大学と同様「国立大学法人」として新たなスタートを切りました。本学の基本理念である“食の生産性向上と安全確保”の実現に向けて教職員一丸となって取り組んでおります。本学は、我が国の生命科学研究領域における28のＣＯＥ拠点大学の一つとして、世界最高水準の研究推進と世界に通用する専門職業人の養成に寄与するため、「畜産衛生学分野に特化した、“個性輝く専門店”大学院重点化単科大学」としての研究教育推進体制の確立に努力しております。

法人化後の１年間について本学の足取りを要約しますと、４月から「大学院畜産学研究科に畜産衛生学独立専攻修士課程」が我が国初の獣医畜産融合分野として新設されました。受け入れる学生定員は15名であります。５月には、本学戦略会議に畜産衛生学独立専攻の博士課程設置及び学部教育獣医畜産科学融合組織の検討グループが設置され、現在、鋭意作業中であります。また、７月には、全学研究推進連携機構（戦略マ

ネジメント室・知的連携企画オフィス）の設置、ドイツ・ミュンヘン大学との大学院学生・研究者交流の拡大協定の締結、そして池坊代議士を長とする衆議院文部科学委員会委員の本学視察などがありました。９月には、本学にとっても関心の高い、文部科学省所掌の獣医学教育協議会の答申「国立大学における獣医学教育の充実方策」が７月末に公開され、全学教員への説明会を開きました。また、人畜共通感染症の研究などで大阪大学と学術連携について合意し、より活発な教員の学術交流と共同研究などを企画しております。10月には、大学と卒業生の緊密な意思疎通を図るために、帯広畜産大学同窓会・同支部との懇談会を大学で開催しました。

本学は地方の畜産に特化された最も小規模な大学であります。しかし、限られた資源や国立大学法人のメリットを最大限に活用しながら、大学運営の効率化、教育研究の活性化に向けた学内改革のスピードアップを図り、国民や社会の期待に必ずや応えていく大学として発展充実して行く所存であります。

「大学の責任　その４」

理事・副学長（総務研究担当）　長澤　秀行（昭和53年獣医卒）

帯広畜産大学が法人化されて１年が過ぎました。法人化の狙いの一つは、社会から課せられた使命を大学の責任として認識することです。法人化に際して本学は「実践的教育の充実」「世界をリードする研究者の養成」及び「地域社会並びに国際社会との連携」により世界最高水準の獣医・農畜産系大学を目指すことを大学の理念とし、これに基づく中期目標・計画を公表しました。平成16年度は、教職員・学生の努力、同窓生のご支援、地域の皆様のご協力によって法人化元年の計画を順調に達成することができました。

法人化によって運営組織は大きく変わりました。例えば、学長のリーダーシップを支える戦略スタッフとして、学長特任補佐（４人）及び学長補佐（11人）による学長補佐室を設置しました。従来、全ての事項を審議していた教授会は、平成16年度には１回開催されたのみであり、毎週開催される戦略会議（構成メンバーは学長、理事、学長特任補佐、事務局長の８人）において運営戦略策定をおこない、教育研究評議会あるいは経営協議会の審議事項を精査しています。

経営面に関しても、学長のリーダーシップは発揮されています。従来、学内構成員に対して均等に配分されていた教育研究費は、予め教員から予算見積もりの提出を義務づけ、大学教育センターにおいて査定した後に傾斜配分しています。学長裁量による研究費の配分も若手教員あるいは研究計画が緻密で将来性が認められる課題に対して戦略的に配分されています。

平成16年度の特記事項としては、全国で初めての獣医畜産融合分野による畜産衛生学独立専攻（修士課程）の設置や、国民や社会に対する説明責任を果たす目的で設置した「広報室」、生涯教育や高大連携を推進する「地域貢献推進室」の設置などがあります。その他、帯広農業高校との連携協力に関する協定の締結、十勝に位置する主要な試験研究機関との連携協力推進を目的とする「スクラム十勝」の設立、ベトナム・フエ大学との学術交流協定締結、独立行政法人国際協力機構（JICA）と国際協力を目的とした連携協力に関する協定締結等、があります。

また、法人化により全国の国立大学運営予算が削減される中で、文部科学省に対する概算要求によって原虫病研究センターの組織整備、大型研究プロジェクトの採択、高額機器購入のための設備費の措置や、学部棟の改修工事、建物新営工事などの施設整備事業も認められました。教員による外部資金獲得も着々と成果を上げています。

法人化後１年を経て、帯広畜産大学は特色を生かして健闘していると自負しておりますが、検討課題や反省すべき点があるのも事実です。その一つは情報発信についてです。国立大学の責任を果たす上で、情報発信は非常に重要です。同窓生に、社会に、そして学内の教職員や学生に対する、大学運営戦略や活動実績などに関する正確な情報発信の重要性は認識しているのですが、不十分であると反省しています。今後、同窓の皆様へは、的確な情報発信を心掛けたいと思いますので、変わらぬご支援、貴重なご意見をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

法人化後の教育等に関する取り組みについて

副学長（教育・学生担当）　石橋　憲一（昭和42年農化卒）

法人化後、１年余りを経過した本学の教育を中心とした新たな取り組みについて、いくつかをご紹介いたします。学習支援に関するものとして、農業高校からの推薦入学者を対象とした、自己学習支援プログラムやｅ－ラーニング教材による英語学習プログラムを実施しました。自己学習支援プログラムは、普通高校に比べて英語や理系基礎科目（生物、化学、物理、数学）の授業時間数の少ない農業高校出身者に対し、それらの科目を上級学年のチューターの支援を受けながら自

力で学習し、本学の授業についていける学力をつけてもらうもので、この１年間でかなりの成果を上げております。これまで、畜産科学科では３年次編入学を実施してきましたが、来年度からは獣医学科でも学士編入学（原則として２年次編入）を行うことにしました。目的意識を持ち、非常に意欲の高い学生が入学することになりますので、獣医学科の学生によい意味での刺激や影響を与えてくれるものと期待しております。

今年の２月に、本学と国際協力機構（ＪＩＣＡ本部）とは国際貢献をになう人材育成を目指し包括協定を締結しました。今年度はＪＩＣＡ本部から５名の専門員を招き、２年生に開講している「国際農業開発協力論（２単位）」の中で国際協力の経験や知識を包含する講義を分担いただいております。18歳人口が減少を続ける中、大学や短大の収容力は平成19年には100％に達するといわれております。今後、少子化の進行に伴い、各大学はいかに優秀な学生を定員まで確保するかについて、対応を迫られております。道内10の国公立大学ではコンソーシアムを形成し、今年は大阪と名古屋で進学説明会を開催する予定です。昨年は名古屋で説明会を行いましたが、本学のブースを訪れた生徒数は北大に次いで多く、入学者に関しては全国区であることを実感した次第です。同窓の皆様には、これからも変わらぬご支援とご協力をお願い致します。

「学術情報基盤としての大学図書館」

図書館長　**長澤　秀行**（昭和53年獣医卒）

本年４月に開催された道内国立大学の図書館関係者の集まりで、各大学の活動状況を聞く機会がありました。本学の平日開館は朝８時30分から夜の９時まで、土曜日・日曜日に加えて祝日も朝９時30分から午後５時30分まで開館しています。学生の試験期間中は夜の10時まで開館しており、サービス面では北海道のトップクラスでした。一般市民へのサービスも、身分証を提示すれば、年齢や地域に制限はなく、図書10冊と雑誌５冊は同時に借りることができ、平成16年度は約1000人の地域の方々に利用していただきました。常日頃から、利用者のことを考えて、図書館職員がいろいろと努力している様子は知っていましたが、他の大学と比較するとより一層、本学の充実度合いが明らかになり、夜の懇親会での酒がいつもより旨く感じられました。

社会情勢の変化に伴う学術情報基盤としての大学図書館の在り方については、全国的な検討が進められています。大学図書館は、大学本来の目的である高等教育と学術研究活動を支える重要な学術情報基盤です。図書館では、教育・研究に関わる学術情報の収集、蓄積、組織化が行われ、蓄積された学術情報は検索可能な形で利用されることにより、大学のみならず、地域社会の共有財産となります。これらの学術情報の活用により、大学は人材育成に貢献するとともに、一層の研究活動を促進することになります。最近、電子ジャーナル等の電子情報とインターネットの普及により、各種情報を学生や教職員に提供するサービスの形態は変化してきました。学術情報の電子化が進み、情報流通形態が大変革を遂げ、利用者の情報利用行動が大きく変わりつつある中で、大学図書館の活動には新たな役割が求められており、図書館機能が大学における教育研究活動の成否を左右するといっても過言ではないと思います。

法人化により、国からの予算が毎年１％ずつ削減される中で、人件費や図書館経費も経営の効率化のため抑制される傾向にあります。一方で、業務の多様化及び高度化により、実質的な業務の増大が続いています。情報量の爆発的増加による出版物の増加、それに伴う図書資料の保存スペースの狭隘化、学術論文雑誌の価格上昇、電子ジャーナル導入による経費上昇、等に対応するためには図書館に対する財政基盤が重要です。しかし、国による研究開発投資は科学技術基本計画に沿って、主に競争的研究資金に配分され、学術情報基盤である図書館整備への予算配分は困難な状況です。

以上のような課題を抱えながら、本学図書館は利用者のサービス向上に向けて日々努力しております。北海道内の図書館関係者の集まりがあった時には、これからも胸を張って本学図書館の活動状況を披露できるようにしたいものです。同窓の皆様も、本学に来られた際は、是非、図書館にお立ち寄り戴きたいと思います。

獣医学科を考える

獣医学科長　**西村　昌数**（昭和42年獣医卒）

先ず思うこと、それは一見順調に見える我が大学にリスクがあるとは信じたくないということ。それでも友人達は危惧を抱くと申します。その危惧とはいったい何なのでしょうか。その実態は事故や事件や事変でありましょう。したがって、当然ながらそれらが発生する緊迫性や、それらと出会う蓋然性や、はたまたそれらを被った時の被害の重大性に気付かなければなりません。特にそれらから被るでありましょう消滅や被害については、程度に関して大小を予測したり判断したりするためのものさしも必要です。しからば必然の準備は対策となります。その中心となる施策は、それらの被害を避けること、防ぐこと、減らすこと、補填することでありましょう。ならばそのための設備投資や、組織の制度的対策や、人的構成要素の意識改革が必然となります。

実践的にはリーダー主導方式やワーキンググループ方式および風船風穴方式などが参考になりましょう。いずれにしても、危惧されることが起きる前、予兆段階、起きてしまった後などの各段階で対策は異なって

然るべきです。したがって、現時点で対策しておくこと、発生した時点ですること、発生した後ですることなどに関して、それぞれ質の異なる策が講じられることになるのが常です。何れの場合でも共通する対策の基本は、政策との整合性、反対に斬新な政策を立案する対案性、あるいは一部を改変する改善に法ることになります。どの道危機管理は、現状維持の視点で「防ぐ」を主眼とするならば、マイナス面を切り、より悪化することを避け、そのような提案を登用することになります。対するに現状を打破して進展を獲得することに主眼を置くならば、プラス思考を取り上げ、より良化することを目指し、戦略的にそのような提案を探すことになります。なぜなら、危機管理は成功の確率を重んじることですが、未来の出来事にこそあれば「保証」の範囲にはないからであります。それは考える対象であって、マニュアル化できると期待することは組織戦略的に相応しくありません。組織の未来に掛替えのない価値を見出そうと志向すると危機管理はそれなりの意義を主張できます。しかし、いまこそ改革の時機到来と、偶然を否定して僅かでも主体となって寄与する勇気を誇りとして生きて行く確率を高めるべきであります。生態系には危機が相応しいのが歴史の教えるところです。したがって、危機管理はその系の見方によって変わるのが正しい、と思います。

その視点に立つ時、我が獣医学科に不安を払拭できない自己を恥ずかしく思います。しかし、あくまで「確率」を高めるべく挑戦したいと思います。どうか、さらなるご支援とご鞭撻とを切にお願いする次第です。

畜産科学科

畜産科学科長　**荒井　威吉**

国立大学は平成16年４月から法人化され、国立大学法人に移行されて１年が過ぎました。本学も独自に個性と特色のある研究教育を行うため、今後６年間の中期目標に基づき、教育環境の整備、研究教育の向上、地域貢献、国際交流などに取り組んでいます。また本年度は原虫病関連研究施設の増設、総合研究棟１号館（旧学部棟）改装の第２期工事などが予定されており、構内の各施設への案内板の設置などの環境整備も行われていますので、同窓生各位が来学された折に、ご満足いただけるような学内環境に整備されつつあります。

本学は平成14年度に畜産科学系３学科を畜産科学科に統合し、教員は獣医学科と畜産科学科の各大講座に席をおき、学生を教育する体制になりました。１・２年生の学生は少人数クラス制で全学農畜産実習などを体験し、共通教育として獣医農畜産の各分野の幅広い基礎知識を修得します。３年生から獣医学ユニットと、「生命」、「食料」、「環境」などの９つの教育ユニットに分属して専門的な教育を受け、希望する先生のもとで卒論研究の指導を受けます。また昨年本学はＪＩＣＡ日本本部と協定を結びましたので、国際的な分野で活躍できる人材育成を重視しています。

獣医学教育の充実は全国的に大きな課題です。本学でも着々と体制を整えていますが、一方では全国の大学などから求められた優秀な人材が異動していくなど、教員の流動化も多くなっています。今後は同窓生各位には本学の先生方が全国各地で活躍するニュースを耳にすることも多くなると思います。本学は平成16年度に獣医学と畜産学を融合した分野として大学院独立専攻の「畜産衛生学専攻」を設置しました。本年度はこれを母体（博士前期課程）とする大学院博士後期課程の平成18年度設置に向けて努力しています。

同窓生各位には熱い思いをお寄せいただき、本学のさらなる発展と、国際社会に貢献できる人材の育成にご支援いただければ幸いです。

原虫病研究センター：更なる発展を目指して

原虫病研究センター長　**五十嵐郁男**（昭和52年獣医卒）

原虫病研究センターは全国共同利用施設になり、６年目を迎えました。また、「21世紀ＣＯＥプログラム」も４年目に入りました。平成16年５月に「21世紀ＣＯＥプログラム」の中間評価のヒアリングがあり、11月末にその結果が公表されました。本学のプログラムである「動物性蛋白質資源の生産向上と食の安全確保―特に原虫病研究を中心として―」はＢ評価をうけ、原虫病研究を中心とした研究組織の整備、人材育成に一層の努力を要するとのコメントがつけられました。これらの指摘に基づき、１．原虫病を中心とする研究・教育組織と研究協力体制の確立、２．若手研究者の育成プログラムの充実を計り、拠点形成に努力をしております。また、本学と大阪大学との教育研究における密接な連携を進めることが平成16年９月に合意され、それぞれのＣＯＥ研究の特色を生かし、共同研究や共同シンポジュウムを開催し、人獣共通感染症など人の健康と食の安全を脅かす問題の解決を目指しています。具体的には、第１回ＣＯＥ合同シンポジュウムが平成17年２月14、15日、大阪大学においてに「感染症・免疫・食の安全」と題して開催されました。第２回のＣ

ＯＥ合同シンポジュウムが８月下旬に本学で開催される予定です。また、17年度の概算要求で特別教育研究経費の研究推進による「人獣共通原虫病の制圧」事業が認められ、第４部門として「国際監視部門」が設置されます。更に文部科学省の新興・再興感染拠点形成プログラムのネットワークにも参画予定です。また、平成７年から、実施してきた国際協力機構（ＪＩＣＡ）の要請による「上級原虫病コース」が今年９月で10年になります。今年11月からは、これまでの原虫病研究コースを拡大発展させた、「食の安全確保のための人獣共通感染症の制圧」コースを大動物特殊疾病研究センターと協力しながら実施予定です。以上のように、学内・学外の支援を受けながら、研究組織の整備、教育研究活動の拡大により、更なる発展のために努力致しますので、同窓生の皆様のより一層のご理解とご支援をお願いします。

地域共同研究センター

地域共同研究センター長　**岡本　明治**（昭和44年草地卒）

卒業生の皆様、お変わりありませんか、この度は大学の営業本部であります地域共同研究センターの近況をお知らせいたします。まず、４月に専任教員の変更がありました。文部科学省からの出向で、東北大学研究協力部長であった渡邉晴美（男性）教授を新たに迎えました。渡邉教授は早稲田大学の出身で筑波大学を皮切りにユネスコ、本省学術国際局、東大、文化庁長官官房、放送大学、国立科学博物館、東北大学等を歴任されました。渡邉氏は国際交流、研究交流、著作権や知的財産権などに豊富な経験をお持ちで、本学の共同研究センターが国際的な活動も視野に入れたセンターに発展するために最適の人材です。前任の根本助教授は文部科学本省の研究振興局ライフサイエンス課課長補佐＆同課生命倫理・安全対策室室長補佐として栄転されました。根本先生には法人化にともなう多くの規則や知的財産に関する組織体制を整備していただきました。移動後の本省におけるポジションも本学の専門域と非常に密接な分野ですので、今後とも帯広畜産大学のよき理解者としてお付き合いが続くことと思います。

法人化後１年間のセンターの活動を振り返りますと、２つ目の大学発ベンチャー〔（株）バイオフローラ；堀川　洋教授〕が設立されました。また、従来のような企業からの提案を待つのではなく課題を整理し企業に企画を提案していくことで、共同研究の質の充実と技術移転の可能性追求に重点を置きました。この結果、共同研究から25件の特許出願が発生し、量から質への活動の転換を始めることができたと自負しております。

また、東京の国際フォーラムでのイノベーションジャパン展、アグリビジネス展や幕張メッセでの農林水産環境展、フーデックスジャパンなどへ地域の企業と連携して積極的に出展し多くの反応がありました。例えば、５月２日のＮＨＫ総合ＴＶの“おはよう日本”では、幕張で見たということでＮＨＫの担当ディレクターが三上教授の生ハムと畜大チーズを報道してくれました。さらに６月６日の民間ＴＶの昼番組で、みのもんた司会の健康食に関する番組では、小嶋先生の小豆のポリフェノールの効果が報道されました。このように帯広畜産大学の名前が良い意味で全国に流れることにより、多くの受験生や関連企業の方々が畜産大学に関心をもって下さることを願っております。来年度2006年は、地域共同研究センター設立10周年を迎えます。５月30日に記念祝賀会を予定しておりますので、多くの卒業生の皆様のご来学を心から歓迎いたします。

畜産フィールド科学センターの近況

畜産フィールド科学センター長　**左　　久**

今年も同窓会会員の皆様に近況をご報告する時期になりました。生き物相手の畜産フィールド科学センターの活動は天候に左右されますが、今年の農耕作業は順調に進んでいるものの牧草の伸びは例年より10日ほど遅れています。乳牛の飼養頭数は170頭でここ数年変わっていませんが、搾乳頭数は現在62頭で最盛期の70頭から減少しています。これは昨年の猛暑の影響で受胎率が低下したことが今になって影響しているのです。

附属農場が３年前に畜産フィールド科学センターに改組され、さらに昨年の大学法人化と同時に学部附属施設から学内共同利用施設という位置づけに変わりました。古い同窓会員の皆様には、名称が変わり、位置づけが変わりと毎年変わったことばかりが目について、「結局どうなったんだ」と問われそうですが、約120ha の畑で飼料を作り、乳牛を飼って乳を絞り、その一部はそこの工場でパック詰めにして販売するという農場を舞台に実習教育と研究活動を展開するという機能に変化はありません。

畜産フィールド科学センターでは年報「畜産フィールド科学」を毎年発行して一年間の活動を総括しています。昨年の年報をみますと、このセンターでは一年間に40科目の実習が行われ、のべ1,760人の学生がここで実習教育を受けています。また、年間66件の研究

がセンターを使って実施され、その７割が牛を使った研究でした。170頭の牛が平均６回実験に使われ、１回の実験に約15頭の牛が使われた計算になります。このようにセンターが教育と研究に重要な役割を果たすことができるのも施設がキャンパスと隣接しているという畜産学の教育研究機関としては願ってもない好条件が整っているためです。

生産活動では、従来の畜大牛乳の学外販売は順調に推移しておりますので、低温殺菌牛乳の良さを広く理解して貰い普及させたいと取り組んでいます。

最後になりましたが、今年１月から畜産フィールド科学センターの専任教員に木田克弥助教授が着任しました。木田助教授は本学獣医ＯＢです。再び専任教員が３人揃いました。今後は地域貢献活動も含めてより充実した活発なフィールド科学センターにしたいと念じております。引き続き同窓会会員の皆様のご支援とご協力をお願い致します。

大動物特殊疾病研究センター

センター長　**牧野　壮一**（昭和54年獣医卒）

大動物特殊疾病研究センターは、2004年４月の大学の法人化に伴い、学内施設として部局化されました。「大動物特殊疾病の診断・治療・予防法の開発に関する基礎研究と応用研究を行い、家畜衛生の向上と食の安全性の確保に貢献することを目的とする」施設として、獣医系教官を中心にして構成されていますが、本学畜産衛生専攻の食品有害微生物講座として大学院教育研究に協力し、獣医学科・畜産科学科、ならびに岐阜連合獣医学研究科の教育研究に参画しています。本センターは、動物臨床分野、薬効治療分野、特定疾病分野、食品有害微生物分野の４つ分野から成っています。昨年度に大動物臨床分野の大星先生が定年退官され、助教授の山岸先生は岩手大学の大動物臨床の柱になるべく本年６月に転出されました。非常に惜しい人材ではありますが、東北地域の家畜診療の発展のために尽くしていただきたいとセンター員一同期待しています。他の３分野は、特定疾病分野に本年４月よりアメリカで研究活動をされてこられた小川晴子先生を助教授として特定疾病分野にお迎えし、２名体制になりました。薬効治療分野には助教授１名、食品有害微生物分野には教授・助教授２名で、まだまだ発展途上の若いセンターです。今年度中には、大動物臨床分野に、大動物の診断・治療・予防法の臨床応用試験や疫学調査による大動物特殊疾病の汚染状況の把握を研究し、家畜衛生を担当できる教官を採用したいと考えています。決まりましたら、同窓会の皆様にも是非温かいご支援いただければと思います。

今、本センターは大学の講義棟中庭のプレハブの建物（プレハブとはいえ、非常に居心地は良く、一見プレハブとは見えませんが）を中心に活動しています。センター員、学生を含め、一箇所で活動しているわけではなく、色々不都合も生じています。早いうちに一箇所に集まって教育研究を行いたいと思っています。幸いなことに、その目処もつき、近々新しい建物に移れそうな状況です。これも、学内の多くの方のご尽力の賜物と感謝しています。やっと次年度からは落ち着いて仕事が出来そうです。

附属家畜病院

病院長　**宮原　和郎**（昭和53年獣医卒）

家畜病院の近況をご報告いたします。

昨年はＢＳＥ対策として病理解剖室が改修され、Ｐ２レベル検査室が整備されましたことから、従来通り成牛の病理解剖検査が実施できるようになりました。また、病理解剖検査のために搬入された大動物の生前検査期間中の飼育施設として、従来の車庫を病牛の入院厩舎として改修し、これに伴って診療車の車庫とトラックのポートを移設しました。本年３月にはマルチスライスＸ線ＣＴ装置（東芝メディカル、Aquilion Super ４）が導入されました。Ｘ線ＣＴ装置は現在ほとんどの獣医系大学に設置され、獣医師国家試験にも出題され始めており、本学にも漸くといった感は否めませんが、今回導入したＸ線ＣＴ装置は同時に４枚の断層画像を撮影することが可能であり、設定条件にもよりますが、写真１に示した牛の３Ｄ画像は撮像時間約１分でスライス厚0.5mm で320枚の断層画像を収集し、この画像データを基にほぼリアルタイムに再構成して作成されたカラー画像です。写真の左側は鼻梁の断面で、外貌として見られる中央の目や写真右側の耳介に対して、上方の頭部水平断面には脳が観察されます。このような画像は言うまでもなく形態の理解に非常に有用です。例えば小動物の骨盤腔内の腫瘍摘出に際しては、術前に腫瘍の位置、浸潤程度、血管走行、腫瘍摘出のための骨盤の離断部位、腫瘍摘出後の骨盤の整復機材の選択などが可能であり、非常に有用な情報が得られるようになりました。このようなＸ線ＣＴ装置はほぼ同時期に本学の他、獣医系３大学でも導入されましたが、本学では小動物ばかりではなく、広い

Ｘ線ＣＴ室を確保し、さらに造影剤の自動注入装置、高速画像処理装置の他、天井走行リフト、大動物用撮影架台を設置することによって馬や牛などの大動物の検査も可能であり、すでに応用され始めています（写真２）。また、昨年は1970年に現在の家畜病院の新築と共に導入された世界で始めての据置型大動物用Ｘ線透視装置が残念ながら老朽化に伴い使用不能となりました。大動物のＸ線透視診断はすでに車載型の初代の大動物Ｘ線診療車、現在の総合画像診断車に受け継がれていますが、据置型大動物用Ｘ線透視装置はその高出力から小動物の高齢化に伴って増加する腫瘍疾患のためのＸ線治療装置として活躍していました。後継として小型ではありますが、Ｘ線ＣＴ室には新たにＸ線治療装置が導入され、稼働を始めています。

これらの診断治療装置の導入ばかりではなく、より充実した診療を行うために平成17年度からは初めて有給の勤務獣医師１名を確保し、さらに従来の非常勤職員に動物看護士を雇用することによって、とくに小動物診療のサポート体制の充実を計っています。

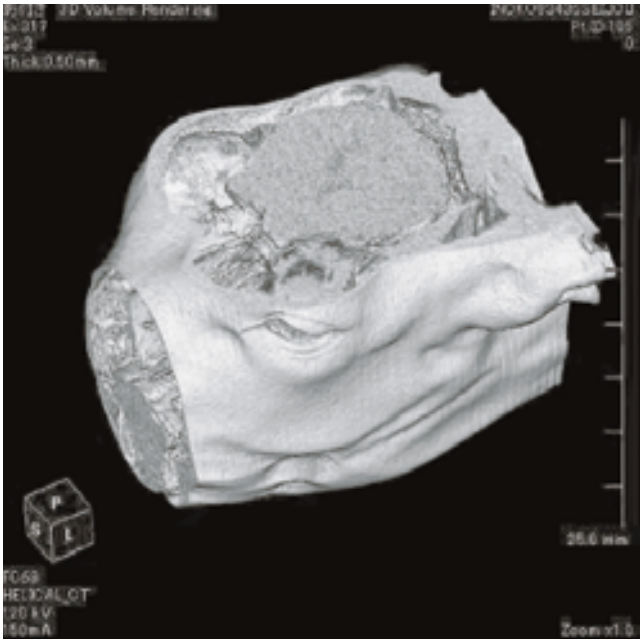

写真１；牛の頭部３Ｄ画像

写真２；馬のＣＴ検査風景

同窓十勝会の最近の動向について

帯広畜産大学同窓十勝会会長　**大石　和也**（昭和33年総農卒）

帯広畜産大学同窓の皆様にはお元気でご活躍されていること、心からお慶び申し上げます。

昨年４月以降、帯広畜産大学は予定通り「国立大学法人帯広畜産大学」（以下畜大と略称）として再出発しました。

畜大はこの１年で新組織での運営を鈴木直義学長を中心として、自主的、自律的大学運営と経営に取り組み、成果を上げていることは喜ばしいことと思っております。特に本来、大学の使命であります教育と研究については益々実績を上げていることは何より嬉しく思っております。

更に畜大として果たすべき社会貢献につきましては、地域貢献を通じて大きな役割を果たし、今後の地域振興に関する人々は大きな指針と将来への展望をもたらしております。

法人化された国立大学ではありますが、今後も国からの運営費交付金による財政処置は続くと思われます。ただし、その額は年々減少していくと思われます。まして、当大学のような地方の小規模大学は財政的には大変な苦労があるのではないかと思われます。

このような状況の下において、帯広畜産大学同窓十勝会としては、畜大の発展と活躍のために効果的な何をなすべきかを熟考した結果、以下の結論に達しました。

先にも述べたように、現状の畜大が置かれた立場には財政的な支援が最も重要であると思われます。同窓会には金品を集めることはできないと思われるので、寄付行為のできる帯広畜産大学後援会への寄付を通じて支援することが、最有効な方法と考えられます。

幸いにもこの帯広畜産大学後援会の役員には、高田　薫同窓会長が理事として参画しており、同窓会の意見も充分反映されると思います。

平成16年度の当会の役員会でも幹事会においても、後援会や関連する事項の主旨説明に明け暮れました。

一人でも多く、この帯広畜産大学後援会の主旨に賛同し、後援会への個人寄附をしていただければ幸いと思っております。

既にご寄附を頂いている各位には、今後とも継続をお願いし、今年のご挨拶に代えさせて頂きます。

札幌同窓会

会長　安田　　勲（昭和31年総農卒）

畜大を卒業して20～30年、更に古い者（小生など50年になる）は、母校の様子を知りたいと思います。（友人たちと会うと）

そこで、大学と同窓会、講演会の３者連合体（組織）をつくり、広報活動を希望します。（インターネット、ＨＰを活用する世代と活字による世代がいますので、広報紙の有料化、年間契約のことなど検討して欲しいです）70周年に向けて畜大校史を刊行し（研究会を組織して）、各時代の特色ある役割を果たして来た記録の発刊についてご検討願いたい。

農業生産活動の現場、食の安全と確保について、今こそ帯畜大はダイナミックな戦略を展開するよう期待する。（我が母校が規模の大小だけでなく、広く大きな使命に燃える取組みができるなら、同窓生として何ができるか、何をやらなければならないか、を考え、動いていきたい）大学と地域と同窓会の連合体による研究・教育・農業発展のチャンス到来と受けとめ、目標を高く掲げ、知恵と力と汗をかく自助努力の波を起したい。

恵庭支部

支部長　藤岡　　登（昭和50年草地卒）

気温が一向に上がらない今年の春ですが、ようやく私たちの住む恵庭市にも桜の花の季節がやって参りました。恵庭市の同窓生達も、それぞれが春の目覚めと共に新たな季節へ踏み出しているところです。

さて昨年春、久しぶりに市内在住の畜大同窓生が集まっての楽しい懇親の宴を持ちました。会場の「漁川（いざりがわ）」には、10名の卒業生が集まりましたが、現職をリタイヤした方から前年春に卒業した方まで、幅広い年齢差を越えて楽しいおしゃべりの時間を持つことが出来るのはやはり、「同窓の誼（よしみ）」だからでしょう。こうした集いを、たびたび持ちたいのではありますが、なかなか開催できないことも同窓会支部事務局の悩みです。今年も是非、より大勢の同窓生の参加で集いを実施できればと考えています。

関東同窓会の近況

関東同窓会会長　田中　正三（昭和31年獣医卒）

平成17年度の関東同窓会総会及び懇親会は、６月18日18時から東京銀座ライオン７丁目店に於いて、来賓として母校から鈴木直義学長と厚谷彰雄事務局長にお出で頂き、約70名の会員の参加を得て開催されました。今年は、創設期から22年卒業までの大先輩方の姿が見られず、少し寂しい思いが致しましたが、代って昭和40年代から平成10年代卒の新顔の方がたが大勢参加されて会が大いに盛り上がり、新しい息吹を感じさせて頂きました。

総会は、渡部幹事長の総合司会により進められ、会長挨拶に続き、平成16年度の事業及び決算報告と会計監査報告が審議され、続いて平成17年度の事業及び予算案が担当幹事より説明され、何れも原案通り可決承認されました。総会議事の中で特記すべきことは、

１）16年度に第１期卒業の故竹間五郎先輩のご遺族から、当同窓会のために役立てて欲しいと10万円の寄付があり、幹事会で諮った結果、故人の御遺志を永く伝えるため別枠で経理する事とし、17年度からは特別会計の特別基金として別会計を設けて管理する事となりました。

２）17年度には新しい会員名簿を発行致します。同窓会本部が昨年発行した名簿とその後の変更届等により見直しを行いますが、何よりも重要なのは会員からの的確な情報です。今年度は、住所不明者は名簿から削除すると共に、３年間以上に亘り会費未納の方には名簿送付の停止措置をとらせていただくこととなりますので、早めの納入をお願いします。

総会後、懇親会の来賓挨拶で鈴木学長から、法人化後２年目の母校の現状について、お話しがあり、“「食の生産性向上と安全確保の実現」を基本理念として全学一体で取り組んでおり、特に世界最高水準の研究推進と世界に通用する人材の養成に寄与するため、「家畜衛生学分野に特化した、大学院重点化単科大学」としての研究推進体制の確立を急がなければ成らない”

こと、大変厳しい試練の中ではあるが、国民や社会の期待に応えて頑張っていきたい。と力強く抱負が述べられました。

続いて、厚谷事務局長から、予め送って頂いた資料をもとに大学の概況と、母校の支援組織である（財）帯広畜産大学後援会の概要について説明がありました。とくに、近年預金金利の極端な低下に伴い、これまで通りの積立基金の果実のみでは後援会の事業継続が困難となったため、平成10年より新たに賛助会員制度を導入し、（団体会員：年会費１口５万円、個人会員：年会費１口１万円）会員を募集しており、卒業生の団体である同窓会の支部、あるいは個人として是非後援会に加入して援助して頂きたいので、全同窓会員宛てに依頼状を発送する予定である旨の説明がありました。

この事は、昨年10月に開かれた同窓会の本部・支部役員との懇談会の協議結果に基づくものであり、法人化後の激烈な生き残り競争に敢然と闘っている母校の姿を思う時、当会としては、出来るだけ多くの方に賛助会員に入会して頂き、後援会活動への参加を推進するよう協力していきたいと考えております。

なお、懇親会の席上、幹事長から当会にとって大変喜ばしい出来事の一つとして、昨年秋の叙勲に際して当会会員の３名が、はからずも“瑞宝小綬章”（旧勲四等相当）を受章された旨紹介がありました。伊藤　馨（昭和31年獣医卒、防衛庁）、田中正三（昭和31年獣医卒、農水省）、難波　江（昭和32年獣医卒、厚生労働省）の３方です。いずれも、所属の省庁において重要な職務に永年に亘り従事して、功労を積んだことに対し授与されたもので、それぞれ異分野とは言え同窓の出身者３名が同時期に叙勲を受けることは珍しい事だそうです。叙勲は本人の業績に対する社会的評価に基く栄誉であると共に、これを支えてくれた周囲の人たちのご支援・協力が実って初めて達成出来たことを思う時、潜越ではありますが受賞者の一人としまして、同窓の皆様に心から厚くお礼申しあげますとともに、今後同窓の多くの方々から叙勲等の朗報が届けられます事を心から願って止みません。

大阪支部近況報告

大阪支部会長　金谷　一夫
事務局長　甘利　靖男（昭和42年酪農卒）

大阪支部結成総会を平成13年４月８日に開いてから３年を経て、昨年４月25日に第２回総会を開催することが出来ました。また、同年12月５日には忘年会を兼ねた親睦会を開きました。これらの詳しい様子は、当支部ホームページで公開しています。（「帯広畜産大学同窓会　大阪支部」で検索）

ご覧頂ければ、懐かしい仲間や旧教官の写真などを発見出来るかも知れません。当ホームページをリンクして頂ける先、及びリンクをご希望の方を募集しておりますので是非一度アクセスして下さい。「ＨＰ担当者増戸義典（生産Ｓ59）さん」

金谷一夫会長の方針で、当支部には会則や会費など一切有りません。

会の結束は、カリスマ金谷会長（会則５条）の求心力に負うところが絶大で、会の世話役は阿吽の内に会長の意を解してその役目を遂行しています。

組織としての縛りが全く無い為に、崩壊しそうになる時もあります。そんな時、万般に目配りをして、何事も無かったかのように支部を統率、指揮されるのが大橋進事務局長（獣医Ｓ38）です。それは、割れそうな茶碗を両の掌で包み込むようにして支えている茶人を思わせます。

また、第２回総会は奈良博（獣医Ｓ44）さんが、忘年会は増戸義典（生産Ｓ59）さんが企画運営された様に、各世話役が適宜状況に応じて支部発展のため貢献されています。

カリスマ金谷会長の次なる「天の声」が、どの様なもので何時発せられるかを期待しながら、ワイワイ、ガヤガヤ、あれやこれやの騒がしい大阪支部の近況です。

兵庫県支部

兵庫県支部長　俵　　孝（昭和37年獣医卒）

平成16年11月20日（土）神戸市内で平成16年度総会を開催しました。

当日は20名が参加し、会場はやや狭かったものの貸し切りであったため、逍遥歌を歌い、大いに盛り上がりました。

また、会長である高木さんから役員の若返りの提案があり、会長を含め役員の大幅な改選を行なうこととなりました。

前会長の高木先輩から次期会長にとのお話があった際に、一瞬まだ他に先輩がとの思いがありました。しかし、私自身が結構古い分類に入る年齢であることに気づくとともに、周囲の状況を考慮してそのような立場にあると判断し、引受けることにいたしました。

幸い副会長の田中君、横幕君を始め優秀な後輩がたくさん居られるので、精一杯努めて後に、なるべく早

い時期に次の人にバトンを渡すつもりでいます。
同窓会で一杯飲み旧交を温め合うことは、楽しくまた意義のあることですが、それだけで終わるのでは少し勿体ないような気がします。
同窓生には色々な分野のエキスパートが数多くいらっしゃいます。
今後、各々が持っている情報、知識、経験、人脈などを活用し、無理のない範囲で、お互いに助け合えるようなことができないかと考えております。
具体的な案はまだありませんが、皆様のお知恵とご協力をいただき、よりすばらしい同窓会支部にしていきたいと考えております。

遥か九州・沖縄からの便り

同窓会九州支部会長　深田　泰三（昭和30年酪農卒）

2004.11.27（土）十勝晴れとはいきませんが、宴会日和の熊本県山鹿温泉で、昭和29年卒から平成２年卒までの23名が一堂に会し、恒例の総会を開催しました。
今回は、創立40周年を２年後に控え、いつもと趣を異にし、減少気味の総会出席者対策と本会の継続運営に関する件を「酔って語らう」前に、真剣に討議しました。
第一に、創立当初から交替なしの、会長、事務局長（高木信紘―昭和42年獣医卒）に加え、森田満雄―昭和49年獣医卒、村上建徳―昭和49年酪農卒、家入誠二―昭和55年草地卒の３氏を副会長とし、20代、30代会員の掘り起こしと総会出席の勧誘を積極的に行う。
第二に、事務局に支部専用メールアドレス（chikudai@jcom.home.ne.jp）を設置し、各県の幹事との連携強化と若手会員へのメール攻勢をかける。
第三に、総会は従来どおり年一回とするが、各県ごとに若手の取り込みを行い、随時会合を開催し、総会への出席を促す。
要約すると以上ですが、本会の重鎮であった守田貞龍大先輩のご逝去や、過去の元気者が次々と病魔に見舞われるなど、やや陰りが見え始めた中、出席者それぞれの本会継続への思い入れは真剣そのもので、会長として誠に心強いものでした。
もちろん、今回は二次会、三次会へと最高の盛り上がりとなり、久々に有意義な総会でした。私も酒席はまだ現役です。老骨にムチ打って、九州支部の発展に寄与したいと考えています。
さて、我が母校は、昨年４月１日「国立大学法人帯広畜産大学」として、私の無二の親友である鈴木学長をはじめ関係各位のご尽力により、地域に根ざした「個性輝く専門店単科大学」をめざし新たな旅立ちをしました。私ども会員一同、今後とも畜大を愛し、畜大に誇りを持って、遥か九州・沖縄から、微力ではありますが「帯広畜産大学」にエールを送り続けて参ります。

同窓会名簿担当からのお知らせ

名簿編集委員長　**樋口　昭則**（昭和46年酪農卒）

最新の同窓会名簿は、平成16年11月に発行しました。皆様のご協力に御礼申し上げます。名簿は、隔年発行なので、平成18年11月まではこの名簿を１冊3,000円で配付しています。ご購入希望の方は、同窓会事務局（tel　0155-49-5365、5510、5547）へご連絡下さい。
名簿の管理は、毎年発行する同窓会報の発送の際に住所等変更届を同封し、また、名簿原稿を学内各研究室や名簿委員にチェックしてもらう等して、訂正作業を行っています。それでも不明者の数は減らず、名簿の巻末にたくさんの不明者一覧を記載しています。
不明者の中に消息をご存じの方がいましたら、いつでも結構ですので、名簿担当の樋口（E-mail　higuchi@obihiro.ac.jp、Fax　0155-49-5439）か、岸本（E-mail　tksmt@obihiro.ac.jp、Fax　0155-49-5522）までご連絡下さい。また、ご自身の住所・勤務先等に変更があるときも、ご連絡をよろしくお願いします。
名簿の協賛広告は、平成16年度版では不況のせいもあって、裏表紙とその前の頁だけになってしまいました。広告収入だけで名簿を発行している大学もあると聞いていますが、畜大同窓会会員各位も、自営者だけでなく、勤務している会社関係等も大いに活用していただきたく、お願いいたします。
同窓会名簿の発行については、プライバシーの保護をしっかりとやらざるをえなくなっています。データ入力は１台のパソコンで行い、印刷会社とのやりとりは１枚のＣＤで行うようにして、外部にもれないようなシステムにしています。それでも、プライバシーを理由に、住所を知らせていただけない（不明者）、あるいは、不掲載を希望する人が増えています。せめて不明者は不掲載希望にしていただいて、毎年発行される同窓会報は受け取れるようにしていただきたいと思います。
また、最近の卒業生については、不明になる者が増えています。卒業生自身のプライバシー意識の高まりと、大学における研究室制度の形骸化が、その原因と考えられます。畜大でも法人化等の組織再編に対応して、卒業研究は学生が教員に分属する形で行われるケースが増えており、研究室単位で面倒を見るスタイルは減少しています。そのため、教員個人単位では、卒業生の動向も十分に把握できなくなりつつあります。同窓会の名簿についても組織再編に対応して、編集システムを改善する必要があります。
次回の名簿発行は、平成18年11月末を予定しています。その間には、自治体の大幅な合併により、大量の住所変更が予想されます。住所変更用のパソコンソフトの購入など、迅速な対応を考えていますが、皆様からの住所変更届等の連絡もよろしくお願いします。

帯広畜産大学同窓会平成15年度会計報告

（平成15年10月１日～平成16年９月30日）

【通常会計】

収入の部

項　　目	H15予算額	H15決算額	増　　減	備　　考
前年度繰越金	12,857,579	12,857,579	0	平成14年度より
名 簿 販 売	60,000	684,500	624,500	28部×3,000円、１部×3,500円、16年：199部×3,000円
協賛金、終身会費	3,600,000	3,822,000	222,000	協賛20,000円×174名、10,000円×１名：終身20,000円×13名、10,000円×１名：寄付6,000円×２名、ブラジル支部より50,000円
雑　収　入	5,000	205,054	200,054	懇親会会費、預金利子、寄付など
特別会計から	616,556	649,287	32,731	
合　　計	17,139,135	18,218,420	1,079,285	

支出の部

項　　目	H15予算額	H15決算額	増　　減	備　　考
印　刷　代	1,000,000	1,768,017	768,017	名簿、会報の印刷ほか
大学後援経費	300,000	350,000	50,000	学術交流支援20万円、後援会賛助会費10万円、大学祭実行委員５万円
通信、郵送料	1,000,000	184,721	△ 815,279	料金受取人払（39,280円）ほか
人　件　費	400,000	269,461	△ 130,539	名簿整理等のアルバイト代
事　務　費	100,000	182,383	82,383	ノートパソコン、事務用品、コピー代ほか
会　議　費	200,000	207,257	7,257	事務局会議、役員会、総会ほか
交　通　費	100,000	52,000	△ 48,000	役員会会議旅費
役 員 手 当	360,000	0	△ 360,000	昨年度に払い込み済
記 念 品 代	441,000	20,790	△ 420,210	36名分
協賛金返還	0	23,000	23,000	退学者１名、名簿返金3,000円
予　備　費	13,188,135	0	△13,188,135	16年度名簿印刷予備費
雑　　費	50,000	46,772	△ 3,228	振込手数料、弔電代
合　　計	17,139,135	3,104,401	△14,034,734	次年度繰り越し15,114,019円

【特別会計】

収入の部

項　　目	H15予算額	H15決算額	増　　減	備　　考
前年度繰越金	10,200,000	10,200,000	0	定額郵便貯金＋養老保険＋定額貯金
利　　子	116,556	149,287	32,731	養老保険満期利子
合　　計	10,316,556	10,349,287	32,731	

支出の部

項　　目	H15予算額	H15決算額	増　　減	備　　考
通常会計へ	0	649,287	649,287	養老保険解約および満期利子
合　　計	0	649,287	649,287	次年度繰り越し9,700,000円

平成15年度監査報告（平成15年10月１日～平成16年９月30日）

帯広畜産大学同窓会の上記期間の監査を実施しましたが、適切に処理されていることを認めます。

平成16年10月１日

監　事　石橋　憲一

小野　斉

帯広畜産大学同窓会平成15年度会計報告

（平成15年10月１日～平成16年９月30日）

【通常会計】

収入の部

項　　目	H16予算額	H16決算額	中間増減	備　　考
前年度繰越金	15,114,019	15,114,019	0	平成15年度より
名簿販売	600,000	592,000	△ 8,000	3,000円×194部、10,000円×１部
終身会費、協賛金	4,000,000	3,822,000	△ 178,000	終身20,000円×183名：協賛162,000円
雑　収　入	0	141,161	141,161	後援会タックシール、役員懇親会、三上先生退職記念会35,321円
特別会計から	0	4,525,300	4,525,300	郵便定期満期300万＋利子1,525,300円
預金利息	0	31	31	通常郵便貯金＋普通預金
合　　計	19,714,019	24,194,511	4,480,492	

支出の部

項　　目	H16予算額	H16決算額	中間増減	備　　考
印刷代	4,500,000	3,016,177	△ 1,483,823	名簿等印刷
大学後援経費	300,000	100,000	△ 200,000	後援会へ
通信、郵送料	1,500,000	299,008	△ 1,200,992	名簿等発送
人件費	400,000	177,800	△ 222,200	名簿整理等アルバイト代
事務費	100,000	34,464	△ 65,536	事務用品、コピー代等
会議費	200,000	0	△ 200,000	（役員会、総会）
交通費	100,000	17,000	△ 83,000	役員旅費
役員手当	360,000	360,000	0	２万円（２年分）×18名
記念品代	400,000	0	△ 400,000	（キーホルダー882円×160個＝141,120）
雑　　費	50,000	166,337	116,337	後援会タックシール、役員懇親会、信金振込手数料2,677円、郵便払込料金34,820円
予備費	11,804,019	0	△11,804,019	
合　　計	19,714,019	4,170,786	△15,543,233	

【特別会計】

収入の部

項　　目	H16予算額	H16決算額	中間増減	備　　考
前年度繰越金	9,700,000	9,700,000	0	定額郵便貯金
利　　子	0	1,525,300	1,525,300	定額郵便貯金満期300万解約
合　　計	9,700,000	11,225,300	1,525,300	

支出の部

項　　目	H16予算額	H16決算額	中間増減	備　　考
通常会計へ	0	4,525,300	4,525,300	郵便定期満期300万＋利子1,525,300円
合　　計	0	4,525,300	4,525,300	

☆☆☆ 事務局便り ☆☆☆

同窓会事務局庶務

＜平成16年度　事業報告＞

平成16年10月18日　３年次編入学および大学院合格者へ協賛金納入願いを発送
11月12日　臨時役員会開催
11月30日　平成16年版同窓会名簿の発送
12月11日　第１回役員会および忘年会開催
12月16日　別科推薦入学および学部推薦入学Ⅰ合格者に協賛金納入願いを発送
平成17年２月２日　大学院、帰国子女および社会人特別選抜合格者へ協賛金納入願いを発送
２月　卒業および修了予定者に終身会費納入願いを配布
２月28日　学部前期および別科合格者へ協賛金納入願いを発送
３月15日　学部後期合格者へ協賛金納入願いを発送
３月18日　卒業式において同窓会長祝辞
４月22日　学内役員会開催
７月16日　第２回役員会および代議員会の開催
９月下旬　同窓会報の発送（予定）

財団法人帯広畜産大学後援会賛助会員加入のお願い

財団法人帯広畜産大学後援会は同窓生はじめ帯広・十勝を中心とする企業、団体等からのご寄附を賜り、本学の教育研究活動、国際交流活動等に対する助成を行っておりますが、長期にわたる低金利により助成事業の縮小を迫られている状況にあります。

本財団の健全な運営並びに支援事業の拡充のためには、資金の恒常的な確保が必要になります。同窓会会員の皆様には個別に同後援会の賛助会員への加入をお願いしているところでありますが、このような状況にご理解をいただき、母校発展のために一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

なお、賛助会員加入手続き等につきましては、同窓生各位に送付しておりますが、ご不明な点がございましたら、下記までご連絡願います。

〒080-8555　帯広市稲田町西２線11番地
帯広畜産大学事務局内　財団法人帯広畜産大学後援会事務局

担当連絡係　企画総務部総務課総務係
TEL　0155-49-5216　FAX　0155-49-5229
e-mail：soumu@obihiro.ac.jp

総会および懇親会のご案内

平成17年９月吉日

帯広畜産大学同窓会会員各位

帯広畜産大学同窓会長　**高田　　薫**

平成17年度の帯広畜産大学同窓会総会と懇親会を下記の要領で開催いたします。会員各位のご出席をお願い申し上げます。

記

日　時：平成17年10月15日（土曜日）午前11時より

場　所：農協連ビル５階　大会議室（帯広市西３条南７丁目）

議　題：
１）平成16年度事業報告　　２）平成16年度会計報告
３）平成16年度会計監査報告　　４）役員改選
５）平成17年度事業計画　　６）平成17年度予算案
７）その他

懇　　親　　会

日　時：平成17年10月15日（土曜日）総会終了後

場　所：農協連ビル５階　大会議室

会　費：4,000円

なお、大変恐縮ですが、総会、懇親会へご出席をいただける方のみ、同封のハガキに所定の事項をご記入の上、10月３日（月曜日）までに必着でご投函下さい。これも経費節減のためとご理解いただければ幸いです。

連絡先：**西村　昌数**（事務局長：0155-49-5365）　**辻　　修**（庶　　務：0155-49-5510）
柏村　文郎（会　　計：0155-49-5426）

以　上

写真で見る帯広畜産大学の近況

総合研究棟１号館ロビー

総合研究棟１号館ＩＴＭスタジオ

総合研究棟１号館中庭（左方は特殊疾病研）

総合研究棟１号館内のレンタルラボ

総合研究棟１号館実習室

総合研究棟１号館教員研究室